

我が国の里地里山について

里地里山とは

〔環境省の定義〕

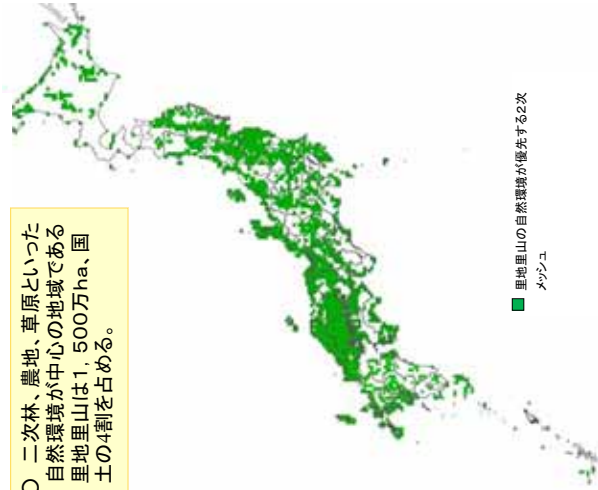
都市域と原生的自然との中間に位置し、様々な人間の働きかけを通じて環境が形成されてきた地域であり、集落をとりまく二次林と、それらと混在する農地、ため池、草原等で構成される地域概念



里地里山の分布の状況

○里地里山の分布

- 二次林、農地、草原といった自然環境が中心の地域である里地里山は1,500万ha、国土の4割を占める。



■ 里地里山の自然環境が優先する2次マツジュ

二次林を中心とする里地里山は56%



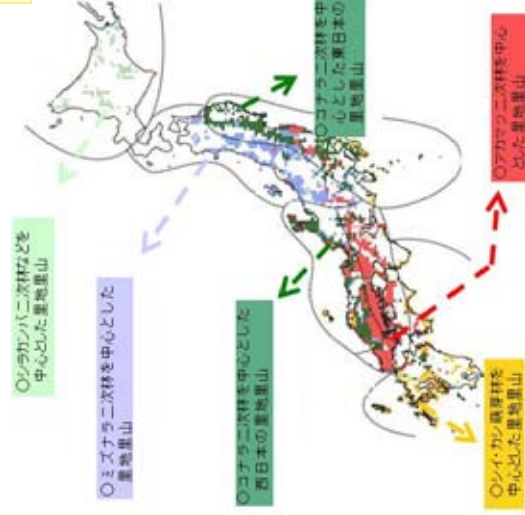
農地を中心とする里地里山は41%



草地を中心とする里地里山は3%



○里地里山の二次林の植生によるブロック分類



○ミズナラ中心
里地里山

○シラカンパ中心
とした里地里山

○コナラ中心
とした里地里山

○アカマツ二次林を中心とした里地里山

○シイ・カシ萌芽林を中心とした里地里山

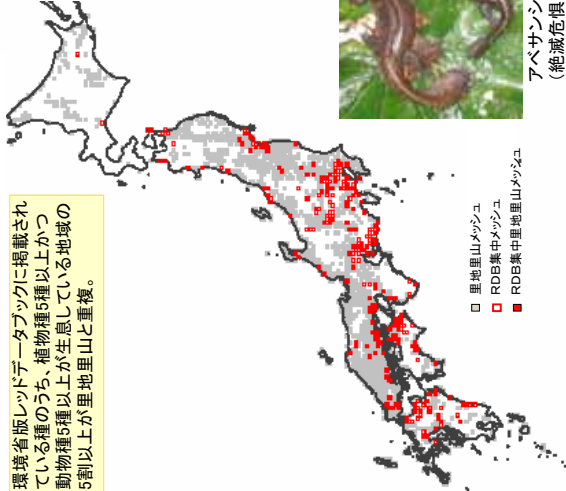
里地里山(二次林や農地を主体とした地域)はその骨格となる二次林のタイプによって5タイプに分類され、6ブロックに区分。

- シラカンパ中心
 - ・放置すると、やがて自然林に代わっていく
- ミズナラ中心
 - ・放置すると、やがて自然林に代わっていく
- コナラ中心(東日本)
 - ・人口が密集しているため開発が多く、タケ・ササの繁茂が目立つ
- コナラ中心(西日本)
 - ・人口密度が低く、雪のやや或少ないことではタケの繁茂が目立つ
- アカマツ二次林中心
 - ・人口が密集しているが、ため池なども多く、希少種も多い
 - ・開発やマツ枯れ、タケの繁茂の問題がある
- シイ・カシ萌芽林を中心
 - ・タケが繁茂しなれば、やがてシイ・カシの自然林に移行する

生物多様性保全上の価値と課題

○里地里山と希少種の集中分布域の重複状況

環境省版レッドデータブックに掲載されている種のうち、植物種5種以上かつ動物種5種以上が生息している地域の5割以上が里地里山と重複。



ツルが巻きつき枯死した樹木



里地で生息するノスリ

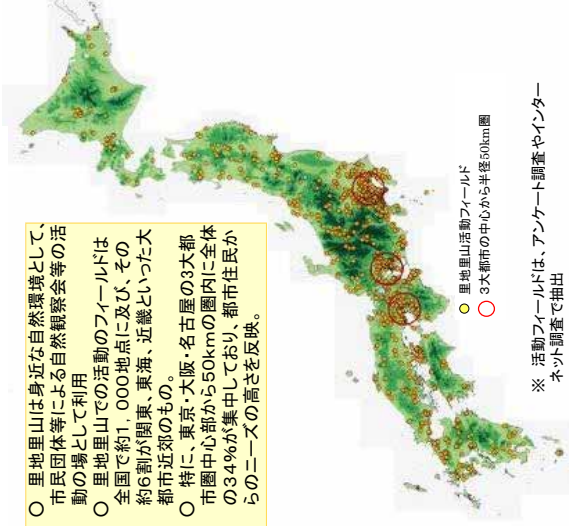


アベサンジウウオ
(絶滅危惧 I A類)

生物多様性保全上の価値と課題

○里地里山の活動フィールドの分布状況

- 里地里山は身近な自然環境として、市民団体等による自然観察会等の活動の場として利用
- 里地里山での活動のフィールドは全国で約1,000地点に及び、その約6割が関東、東海、近畿といった大都市近郊のもの。
- 特に、東京・大阪・名古屋の3大都市圏中心部から50kmの圏内に全体の34%が集中しており、都市住民からのニーズの高さを反映。



地域住民による生物調査



小学校の環境教育との連携(ビオトープづくり)

生物多様性保全上の価値と課題

現在の状況

人口の減少と自然資源の利用の変化

- 里地里山における人口の減少
 - ・ 基幹的農業従事者数 1,175万人 (1960年) → 224万人 (2005年)
 - ・ 農業従事者の高齢化率 20% (1980年代) → 57% (2005年)
- 生物由来の資源利用の低下
 - ・ エネルギー源 薪炭 → 化石燃料
 - ・ 肥料 たい肥 → 化学肥料

生物多様性の危機の一つに位置づけ

- 第2の危機 (人間活動の縮小による危機)
 - ・ 自然資源の利活用にともなう、人の自然への働きかけが減少
 - ・ 里地里山の動植物が絶滅危惧種として数多く選定
 - ・ 各地で取組は始まっているものの、面的・全国的展開は不十分

今後の方向性

地域における人と自然の関係の再構築

- **保全すべき里地里山の検討**
 - 里地里山として維持管理する地域と自然の遷移にゆだねる地域を検討
 - 未来に引き継ぎたい重要な里地里山を選定

自然資源の新たな利活用を検討

- 環境保全型農業の推進
- 環境教育の場やエコツーリズム、バイオマスの利用を検討

多様な主体が共有の資源(コモンズ)として管理していく仕組みの検討

- 農林漁業者やNGOだけでなく、地方公共団体、企業、都市住民の力も借りた里地里山の保全再生を推進
- 都市と農山漁村の交流の積極的推進
- 適正な管理のための情報や活動地域のネットワーク化

第三次生物多様性国家戦略における里地里山の位置づけ